

# 欺かざるの記

——映画文学人生論

原作：国木田独歩（1893-1897）左久良書房・隆文館(1908)  
参考：有島武郎『或る女』（1911-13）「白樺」（1919）叢文閣  
監督：豊田四郎1954） 脚色：八住利雄  
出演：早月葉子（信子）京マチ子 撮影：峰重義  
木部孤筈（独歩）芥川比呂志 音楽：団伊玖磨

人間とは何ぞや。憂苦 其の者にや。  
吾とは何ぞや。

国木田独歩とは誰ぞや。『武蔵野』の作者として私は小学生の頃から知っていた。いかにも作家らしい名前である。作品を読みたいと思ったが、家にも学校の図書館にもない。買ってほしいと臨んでも、望みがかなう雰囲気ではなかった。

それきり六十年、縁がないままに推移し、二年前にやっと『武蔵野』を読んだ。自然主義の作家という先入観を抱いていたが、ロマンチックな要素も濃い。むしろ浪漫主義の作家ではないか。

今回、『欺かざるの記』を読んで、それを確信した。日本人でこんなロマンチックな恋愛と破局を経験した男はめったにいない。経験そのものはめずらしくはないとしても、日記にここまで率直な心情を書き遺す男が存在したことに驚く。

国木田独歩と佐々城信子とが出会った運命の日 は明治二十八年六月十日だった。「其の時はじめて其の令嬢を見たり。宴散じて已に帰らんとする時、余、携ふる処の新刊家庭雑誌二冊を令嬢に与へたり。令嬢曰く又た遊びに來り給へと。令嬢年のころ十六若しくは七。唱歌をよくし風姿素々可憐の少女なり」。

まさに浪漫の美文——続きを読みたくなる。

七月二十日、佐々城信子嬢との交情次第に深からんとするが如し。恋愛なるやも知れず。

八月六日、今朝のぶ嬢より來状あり。筆末に曰



# 欺かざるの記

映画文学人生論

く、「片時もはなれず候きみがおもかげ」。可憐の乙女、汝も終に恋に沈みぬ。よし然らば、限りなき恋愛の泉をくましめよ。

十一月十七日、午後七時信子嬢と結婚す。わが恋愛は遂に勝ちたり。われは遂に信子を得たり。十二月四日、先月十九日の幽居より已に半月を経過したり。吾等が生活は極めて質素成れども極めて楽しく暮らしつゝあるなり。質素は吾等の理想にして其の実効は儉約と時間の経済となり。

明治二十九年四月十二日、「こは不思議なり。まだ帰宅せず」。信子、何処へ行きたる」。

四月十八日、想像も何も及ぶところに非ず。苦悶は鉛の如く血管をころがる。人間とは何ぞや。憂苦其の者にや。吾とは何ぞや。

四月二十四日、余と信子とは今日限り、夫婦の縁、全く絶えたり。昨日、信子に逢ひぬ。信子の本意全く離婚にあることを確かめ得たり。本日午前、徳富氏を訪ふて相談の上、離婚することに決し、其の通知書を認めて徳富君に手渡したり。

十月十九日、天地茫々たり、人生茫々たり、無限より無限に不思議に入り。將に神の真理を信仰せよ。

十月二十六日、われは自己の道を歩むべし。われは詩人として運命づけられしことを確信す。

恋すてふ浮名や消えし後もなほ

恋しきものは恋にぞありける